

トリミングする手の意志

一九三八年発行のデラウエア河流域入植三百周年記念切手群と、その政治性をめぐる考察

鈴木俊弘

1 導入——記念切手について

本論は、北米大陸東岸入植活動三百周年記念の祝祭史を研究するにあたり感じた、ある微妙な違和感から出発している。それは、こんにちでは祝祭事業にさいして当然のごとく付随発行されるようになった「記念切手」の史的政治性を主題にしようとして気がついた、フィンランド政府発行の記念切手の不自然さであった。

蒐集した記念切手を眺めて悦に浸るという姿は、格好の良し悪しはともかく、〈近代的な個人像〉の一形態であろう。一九

世紀の終盤に突如として出現した「記念切手」という紙片は、すぐさま各産業社会に身銭を切って求めようとする大集団を出現させた。その流通は同じ政府発行の薄紙である税印紙類とは正反対の感情を個人に喚起させ、その購入は義務ではなく自発性に突き動かされた趣味として定着した。

〈趣味〉であるがゆえに、購買者たちは記念切手よりも多少古い歴史をもつ記念硬貨あるいはメダル蒐集家の一群と行動原理を重ねるようになった。かれらは、これまで蒐集家と名指される人々が執着したような「アウラ」を有する品々（美術品、骨董稀少品、植民地盗品……）への欲望とは実に対蹠的な収集動

機によって突き動かされている一群である。そのオリジナリティへの無頓着ぶり、対照的に鋭い時刻印への固執、切手やメダルのようなヘオリジナルなきレプリカ品の一斉的な蒐集行為とは、一九世紀半ばまでの市民社会の特性ではなく、あきらかにベネディクト・アンダーソンが言う「後期公定ナショナルリズム」の社会の行動原理である。

フィラテリスト、すなわち「税たることを通れた物品の愛好者」という奇妙な名辞を冠せられた切手蒐集家の一群は、みづから進んで薄紙に巨大な国民史の系列性を浮かび上がらせるような綿密なカタログを作成しはじめた。切手の購入・蒐集・展示・売却を効率よくすすめるための社会流通システムは、欧州各地域でも北米でも二〇世紀には自発的に完成していく。

この薄紙片の魔法じみた性格を利用しない二〇世紀の政府があるだろうか？ 米合衆国のばあい、一八九三年にベンジャミン・ハリソン政権下で発行された「コロンビア」記念切手以降、本論の対象となるF・D・ローズヴェルト政権下の一九三八年までに、二三の政権が一九五種の記念切手を発行してきた。しかも、そのうちの七割を超える数の記念切手が、クリリッジ(1923-29)、フーズァー(1929-33)、ローズヴェルトまでのわずか一五年の間に発行されたのである。大戦戦間期の米社会のなかで、記念切手は明白なる政治道具に変貌し、「記念する

こと」の作為性はこの小さな紙片に凝縮されるようになった。

ちょうど同じ時代、皮肉屋のムージルは「生前の遺稿」(1936)の一篇で、集団的な記念行為とそこに伝統的に付随してきた記念碑の実情について揶揄していた。「地球上で記念碑ほど人目につかないものはないだろう。記念碑は疑いもなく見られるために、いやまさしく注意を喚起するために建てられる。だが同時に、人びとの注意(Aufmerksamkeit)を拒む何らかの要素をはらんでいて、注意は油布にしたたる水滴のように、ほんの一時も静止することなしに記念碑をつたって流れ落ちる」³⁾。記念することの政治性を考察するにあたり、ムージルの指摘は大きな手がかりを与えてくれるだろう。「記念碑はまさに本来引き寄せるべきものを払いのけてしまうのだ。わたしたちが記念碑に気がつかないことなんてできない。逆に記念碑の方がわたしたちの注意をそらし、わたしたちの感覚を拒むのだと言わねばならない。これは記念碑のひとつの特性がじつに積極的に活発化した結果なのだ！」⁴⁾。

欧州のムージルはこのように冷笑するが、少なくとも米国において彼の指摘は逆説的な真理であった。二〇世紀の米国における大規模な祝祭事業は、記念碑に加え、その新規な補遺物たる記念切手・記念メダルが揃いものになって開催されていくのだが、多くの場合、この三物に彫刻・印刷・刻印されたのは、

人びとの注意を促しつつも、その注意が不可避に流れ落ちてしまふような意匠であった。つまり祝祭の意味を深く求めるためではなく、うわべだけで素通りさせてしまおうと誘導する意匠なのだ。そのために実行されたのは、図像に高度な歴史的含意と隱喩を織り交ぜた「奥の深い」造形ではなく、平均値的なイメージの明快さを不自然なまでに強調した「間口の広い」造形である。そこに読み解かれるべき図像学は、もともと凡庸ゆえに気づかれにくく、人びとのあいだに流れこみやすく、だからこそ社会の言説として高度に機能している力の方向性を写しだす鏡のようなものとなる。

2 ワン・スクウェア・インチの攻防

二〇世紀の米合衆国における祝祭活動は、地方州・連邦のレベルを問わず、欧州諸国による北米大陸入植活動三百周年記念の〈歴史的偉業〉を、順繰りにそして系列的に、祝いつづけていくことから出発した。無数の入植活動三百周年記念が各地で企画されるなか、連邦政府の記念切手発行を伴った大規模な祝祭事業を列挙してみても、その活動は合衆国の前史（というよりも起源以前の混沌史）となる一七世紀〈新世界〉の独占的な領有を勝手に宣言する、実に野心的な試みであったことがわか

る。この背景の不安定さこそが、ナショナリズムの醍醐味であろう。一九〇七年のジェームズタウン建設記念、一九〇九年のハドソン河発見記念、一九二〇年のビルグリム・ファーザーズのプリマス上陸記念、一九二四年のユグノーワールン上陸記念、一九三四年になると各州を主体とした入植活動に照準が移り、メリーランドへの英カトリック教徒の入植、一九三五年のコネチカット入植、一九三六年のロードアイランド入植、そして伝説的なロアノーク植民地の「米大陸における最初のインディアニア・デア記念の各祝祭を順次終えて、一九三八年に「合衆国で最初に成立した州」デラウェアの直接的な基礎を築いた、「ニュースウェーデン」の入植記念事業の開催が目前に至ると、東部州を中心に三百周年記念の熱気は頂点に達した。

この「ニュースウェーデン」とは何であるのか？ 欧州北方の王国スウェーデンは一七世紀の初頭に国力を充実させ、スカンディナヴィア半島からバルト海、北海までの沿岸地域を支配下に置く巨大領土を形成しており、独三十年戦争に積極参戦する傍らで、国王特許状を付与したオランダ人運営の西インド会社に北米大陸入植の命を下していた。王国の最初の船団は一六三八年に現在のデラウェア河口に到着し、小さな河岸植民地「ニア・スヴェリエ」を形成する。のちにオランダ、続いて

英国の支配下に入り、以来この植民地域と歴史は「ニュースウェーデン」と総称されたのである。

このデラウェア、ペンシルヴェニア、ニュージャージーというデラウェア河流域三州の土台を築いた入植活動を讃える祝祭は、米国の連邦政府主催の国際祝祭事業と位置づけられた。

一九三六年六月五日、第七四期米連邦議会において公決議第一〇二号「米合衆国政府と合衆国民のデラウェア河流域における最初の永住入植三百周年記念式典その他に、スウェーデン政府及びその賓客の参加を招待する決議」（下院合同決議第四九九号）が採択される。この「東海岸入植三百周年記念祭」にも、もちろん記念切手の企画・発行が決まっており、しかも祝祭のホスト役となるロズヴェルト大統領は個人的に記念切手発行に非常な関心を持っていた人物であった。これを受けて郵政長官のジェイムズ・ファリーは一方インチ大の素地に米国人画家スタンリー・M・アーサーの描いた入植船から下船する植民兵士たちの絵を刻印し、「スウェーデン人の上陸」というキャプションを加える草案をニュースウェーデン入植三百周年記念用の切手の意匠に決定した。

しかしその一年後、米とスウェーデンとの二か国開催を予定していたニュースウェーデン入植記念祝祭に、一七世紀当時にスウェーデンの東部辺境領であったフィンランドに祝祭参加を

認め、代表団を招聘すると定めた第七五期米合衆国議会一般決議第七一号（両院決議第一三五号）が突如として成立する。それはフィン系アメリカ人が一九一七年に独立したばかりの新興共和国フィンランドのために組織した祝祭実行組織「米芬デラウェア河流域三百周年記念祭委員会」の水面下の議会工作が実を結んだ瞬間であった⁵⁰。

すぐさま「米芬委員会」は、連邦政府発行の記念切手の図案をフィンランド中心の偉業に翻意された別作品に完全に差し替えてしまおうと画策し、当時すでに世界的に最高の評価を受けていたフィン人の建築家エリエル・サーリネンに原画担当を依頼した。なぜならば、サーリネンほどの「巨匠」が考案した切



手案を、「連邦郵政省ごときが却下できるはずない」と目論んだからである⁵¹。しかし当のサーリネンが依頼の一切を断ってしまったため、「委員会」は作戦を巧妙に変更する。「委員会」の最重要

構成員で、当時米民主党全国委員の専務理事を努めていたフィン系移民二世のエミル・E・フルヤは、近代的な統計処理による票読みの技法を選挙運営に導入し、その圧倒的な予測能力から「ワシントンの魔術師」と畏れられ、ローズヴェルト大統領誕生の功労者のひとりとして讃えられていた人物である⁷⁰。フルヤは、かつて大統領選挙対策局で上司と部下の関係であったフーリーイとの個人的なコネクションを利用し、大統領執務室にたいてい「スウェード人の上陸」という切手キャプションを「スウェード人とフィン人の上陸」に変更するよう直訴した⁷¹。ローズヴェルトはこの依頼に耳を傾けたばかりか、みずから進んで意匠の変更を指示し、印刷を待つばかりの金型を破棄させた⁷²。それは緊縮財政を掲げていたローズヴェルト政権にとって異例の事態であった。さらに大統領はフィンランド主賓の祝祭に特別消印を用いる許可までも与えたのである。スウェーデン王国駐米大使のヴォルマル・ポストロームは突然の変更劇に驚き、米側に深い遺憾の意を伝え強く再考をうながすも、決定済み事項として異議は拒絶された⁷³。その背景には、欧州向け戦争負債の返還が焦げ付き、歴代政権の帳消し政策にいらだつ米社会のなかで、ただ一国のみ一度の延滞もなく負債を有利子返還しきったフィンランドが過度に絶賛されていた点が挙げられる。ゆえにフィン系アメリカ人たちの要請を全面的に受け入れ、

当該国民の祖先を東海岸入植史の系列に加え「三百周年記念祭」で讃えることは、現政権の政策評価に直結するとの判断がくだされたのである。

3 不格好な記念切手

歴史家のマックス・エングマンはニュースウェーデン入植という歴史的威光の取り分を争ってスウェーデン王国とフィンランド共和国のあいだに繰り広げられた駆け引きの各局面を、非常に軽妙に「綱引き」と表した⁷⁴。米国発行の記念切手についてはまさに「綱引き」であり、このラウンドの勝者はフィンランドであったが、実のところ、そこに本来的な意味での「政治性」はない。

それでは真の政治性はどこにあるのだろうか。ここで米国の入植活動三百周年記念に発行された各切手の図案を並べてみよう。ジェームズタウン記念の題材は「ジョン・スミス」「ポカホンタス」「ジェームズタウンへの上陸」、ハドソン河記念では「帆船とフルトン蒸気船」、プリマス上陸記念では「メイフラワー号」「ビルグリムたちの上陸」「メイフラワー盟約」、ユグノーIIワルーン上陸記念は、「ニューネーデルラント号」「ワルーンたちの上陸」「メイボート記念碑」と、およそ「記念事業」

という題目で連想しうるイメージを決して裏切らない題材が選ばれている。メリーランド入植は有名な二隻の帆船、コネチカットの場合は絵葉書名物のウィリス・ヒルの「チャーター・オーク」の大名、ロードアイランドは初代総督ロジャー・ウィリアムズ、そしてまさに「イメージを裏切らない」凶案の最高峰といえば、ヴァージニア・デア記念の家族像であろう。伝統的な宗教画の聖家族像にならって配置された父母と幼子ヴァージニアのうしろには、〈フロンティア〉のイメージを一挙に引き受ける「丸太小屋」が描かれている。北米大陸において丸太組みの住居はヴァージニアの生まれたとされる一五八七年には存在せず、のちのニア・スヴェリエ建設のときに入植者から伝えられた建物製作技法であることは、この時代すでに指摘されつつあった¹⁹⁾。ヴァージニア・デア生誕記念の切手は、厳密な時代考証ではなく社会のステレオタイプを前面に押し上げた明快性こそが記念切手の第一義であることを教えてくれる。

ニュースウェーデン入植記念の場合、前述の入植船から下船する兵士たちという米国の切手の他に、スウェーデン、フィンランドそれぞれの政府によって独自の記念切手が発行され、米国内でも一般販売された。スウェーデン政府は額面五オエーレから六〇オエーレまで五種の切手を発行しており、スウェーデン語の“Nya Sverige Minnet”（ニア・スヴェリエ記念）とい

うキャプションと共に「植民地総督ヨハン・プリント」「入植船カルマル・ニーケル号」「スウェーデン王家の紋章」「ニュースウェーデン最初の教会」、そして入植開始当時の国王である「クリスチャーナ女王」の肖像が配置され、米国記念切手が導く祝祭イメージの系列性に程よく沿った意匠にまとめ上げられている。

問題はフィンランド共和国発行の額面三マルッカ五〇ペニの記念切手である。そこには神話の登場人物のような格好をした二人の若い男の上半身と大木の切り株が描かれており、男たちは角棒を梃子に切り株を抜き去ろうとしている。彼らの足下を隠すかのように、羽根飾りをかぶった老ネイティヴァアメリカンの横顔が左下に挿入され、フィンランド政府発行の記念切手



であるにもかかわらず、*“Colonization of Delaware”* と英表記が付されている。逆にこの表記とネイティヴァアメリカンの姿が隠されたら、いったい何の記念切手か判別がつかない。あ

きらかに米国の「記念切手」の系列性に過剰に反応しつつ、結果としてそこから大きく外れているのだ。この違和感の本論執筆者の主観ではけっしてなく、当時の切手趣味情報誌でも取り上げられ、次のように評されている。記事はスウェーデンの記念切手を「二〇世紀の最良の記念切手のひとつ」と褒めちぎったのち、フィンランドの切手について、不思議な印象を隠せないでいるのだ。

図案家は切手のレイアウトに成功しているとは言い難い。私的にはインディアンの頭像を片隅に押し込むのは間違いではないかと思われるし、レタリングや数字の配置も不格好である。しかし、主題はシンプルでドラマチックであり、総じて快活で興味を引く効果を出してはいる¹³⁾。

4 トリミングする手の意志

切手雑誌の記者から「シンプルでドラマチック」と評された意匠の主題であるが、実のところ記念切手の情景にしては見た者への情報量が著しく少なく、ひとつの場面・意味に同定しにくい。絵画部分のトリミング枠が人物と切り株にあまりにも寄りすぎているため、場面や時間、周囲状況が判別不能なのだ。

そして同時に、トリミング枠がこれでもかと人物に寄っているのにもかかわらず、肝心の人物の表情は一切読めない。フィンランド政府の切手は主題を極限まであいまいにして、人物の身体性のみ注目させようとしている。つまり、描かれているのは主題ではなく純粋な動作でしかない。切手は薄茶色のインクで印刷されているが、若い男たちの髪に色はなく、太い陰のついた輪郭で浮かび上がる鼻筋がきわめて高いため、コーカソイドの金髪の青年を連想させる。腰にぶら下げた短刀（ブッコと呼ばれるフィン人の伝統的な小刀で、カレヴァラ神話の一風景を彷彿とさせる）があまりにも小さく見えるため、人物の背の高さ、腕の長さが非常に強調されている。さらに太い木の切り株をいまや倒さんとする瞬間が描かれているために、高い腕力と充実した体力の持ち主であることも伺える。画から読み取れる場面の情報がほとんどないために、*Colonization of Delaware* というキャプションを読んだ瞬間、意味が巧妙に誘導されていく——*colonization* と、いう英単語の意味が、画に入植者の開墾風景という場面を設定するのだ。しかし、本当はどうなのだろうか？

当時のフィンランドを代表する新聞挿絵家であり人気イラストレータ、そして画家でもあったアールノ・カリモが筆をとった、この「入植者開墾」の切手図案には大きな原画が残されて

いる。三百周年記念祭から半世紀後、一九八八年の「ニューズウエーデン入植三五〇周年記念」の展示会で明かされた原画を見ると、記念切手に描かれた主題が、「通常の開墾作業」ではなく、ニューズウエーデン史のなかでフィン人に異なる農法として（スウェード人からは嘲笑と侮蔑の調子で）指摘されてきた「焼き畑農法」の一場面であったことが初めて判明する¹⁵。



まず完全に叙事的な水彩画が大判で制作され、そのあと切手の意匠にあわせて人物のみを強調するようにトリミングされたのだ。男たちの足下には種火の残る大地がひろがり、近場からも遠方からも白煙がかれらを取り囲んでいるため、広範囲で森が焼かれたことがわかる。原画で男たちが掘り返すの

は「焼け焦げた株跡」であって、切手のような木肌のはっきりした切り株ではない。切手の意匠は全力をつくして、焼き畑での農務という場面の情報を「消しかかっている」のである¹⁶。「焼き畑での農作業風景を原画にしつつ、焼き畑での農作業の痕跡を消す」という、この複雑きわまりない意匠構成が行われた真意はどこにあるのだろうか？ 農作業という理由があるにもかかわらず、なぜ「火を放つこと」「燃やそうとする行為」の核心部を隠そうとするのだろうか？ 回答を導く前に、この記念切手に込められた「作意」が偶然でないことを確かめるべく、デラウェア三百周年記念に向けて準備された他の記念品に議論の局面を移したい。

5 たゞ農民を……

米大陸東岸入植活動三百周年を祝うため、ほぼ例外なく用意されたのは、第一に先人の〈偉業〉を讃える記念碑であり、次に比較的小規模の共同体でも製作しやすい記念メダルであった。ここに二〇世紀的な記念品である記念切手の存在が加わり、三物がそれぞれのマテリアル（石、金属、紙）の特性を生かすように意匠が施され、祝祭の意味を三側面から固定するという「セオリー」が成立していた。まず祝祭の開催現場に記念碑が

建立され、その序幕式が式典の一部に組み込まれ、式典の終わりには貴賓に記念メダルが贈呈され、一般の来訪者は皆の祝祭の喜びを遠方の者たちに伝えるため、興奮したペンで手紙を書き、記念切手を貼って投函する、というサイクルが標準化されていったのである。

ゆえに、たいいていの場合において入植活動記念祭の題材にも系列性が敷かれていた。記念碑の場合、誰もが知っているエピソードを絵画風に浮き彫りにするか、航海過程をイメージした海や帆船を主題に据え、記念碑のなかに劇を再現するように事物を彫り込んでいくことで、序幕式に観客全員で拍手することができるよう仕立てられており、記念メダルは主に男性の貴賓に贈呈することを想定して、植民地本国の王侯貴族や、植民地に着任した総督、あるいは歴史的な指導者が彫り込まれるか、荒々しい海をもともしないで進む植民船の勇姿を意匠して鋳込まれたものを取りそろえられた。ニュースウェーデン入植記念の場合でも、スウェーデン主催の式典は、この「セオリー」に厳密に固められて進められていった。入植者たちが〈新大陸〉への第一歩を踏みしめたという史跡が残るデラウェア州ウィルミントン市のフォート・クリスチャーナ公園にローズヴェルトを迎えて大規模に開催された一九三八年六月二七日の主式典では、スウェーデン美術界の重鎮彫刻家であったカール・ミ



レスが制作した「洋上を進むカルマール・ニーケル号」の記念碑が除幕され、台座には航海日誌仕立ての歴史場面が彫り込まれていた。記念メダルは貴賓贈呈用も一般販売用も、ともに帆船と一七世紀の地図の意匠がレリーフになっていた。しかし、フィンランドはこの式典でも異彩を放つことになる。式典の中盤で演説を終えたローズヴェルトにフィンランド共和国外相ルドルフ・W・ホルステイは、フィンランド産の金塊を溶かして打刻した記念メダルの贈呈を申しじた。フィンランドの彫刻家であるアルボ・サイロの意匠をもとにした直径4インチのメダルの表面には左半分はニュースウェーデン植民団の提督に任ぜられていたスウェーデン王室の重臣でフィンランド出身のクラウス・フレミングが配置されていたが、右半分には

フレミングに寄り添うようにしてフィン人農民家族の肖像が並べられていた。フレミングは決して隅に追いやられていたわけではないが、三人の農民家族の一人ひとりが提督とまったく同じ大きさの割合で彫り込まれたために、フレミングはまるで農民たちを引き立てる付随役でしかないような印象になっている。メダルの円周には太い書体にフィン語で「クラウス・ラウリン・フレミング提督／スオミ人の農民 1698-1938」と刻印されていた。またメダルの裏側には、林の中にたたく丸太造りのキリスト教会を背景に、収穫した麦の穂棚が描かれており、表面の農民家族が入植地でも信仰を持ち続け、一定の耕作地を所有して作物を育てていることを示唆していた¹⁶。

スウェード人の要素を抜きにしたフィン人独自の入植三百周年を記念すべく、米芬デラウエア河流域三百周年記念委員会は当時フィンランド最高の彫刻家と目されていたヴァイノ・アールトネンに記念碑の製作を依頼した。ペンシルヴェニア州チェスター市のクロウザー公園には、巨大な赤御影石に航海の物語をイメージした海と帆船の場面を前後に彫り込んだ記念碑が建てられた。しかし、たとえ海や帆船が主題でも、他の記念碑とは異なり、主役はやはり「農民」であった。正面は伐採した丸太から板を切り出している若者が娘から贈り物を授かる場面であり、裏面は植民船に乗り込もうとする農民家族を別の農民の

一家が涙を流して見送る別れの場面であった¹⁷。

このように他の祝祭で見られる記念物の意匠とは一線を画しつつも、フィンランドとフィン系アメリカ人たちがニューズウエーデン入植の記念祭にて言祝ごうとしている、あるいは全面に押し出そうとしているイメージとは、畑を耕し、折りと共に日々を過ごし、そして人間らしい感情をもって人生を過ごす「農民」の姿なのだ。「タロンポイカ」とは、フィン語で農民を表すもともと一般的な言葉だが、その字義は「耕作の人」と「家屋に住まう人」と二通りに解釈できる。一定の地を「耕し」、そこに「定住する」、無名の農民——いったいなぜこのようなあまりに凡庸な生活臭をもった人びとの姿を、わざわざ国際的な祝祭にまで大風呂敷を広げた記念行事にて提示しなければならなかったのだろうか？ まるで、この機会を利用して、国民にフィンランドの農民のイメージを再構築させようとするかのように。

6 「森林破壊者」と火

米芬デラウエア河流域三百周年記念祭委員会の出納担当者であり、この祝祭にフィンランド共和国が出席するのを心待ちにしていた、フィン系アメリカ人の会計士ジョン・サリーは、祝

祭に向けて心情をこのように吐露している。

わたしたちフィン系アメリカ人にとって、「フィンランド共和国のデラウェア河流域三百周年記念祭への参加を議決した」連邦議会決議と、この祝祭の意義は重要です。この議決によって「フィン人は、イングランド人、オランダ人、スウェード人と並び、合衆国起源一二州の成立に貢献した四国民のうちのひとつなのだ」という歴史的事実が公式に認められたからです。(……)〔祝祭において〕フィン系アメリカ人は、以下のような事実を「米国民に刻みつける」絶好の機会をえることとなります。フィンランド国民は、つい最近合衆国に移民としてやってきたばかりではなく、彼らの血は米合衆国のもっとも初期の歴史から米国民の血管のなかに流れているのだ、という事実を¹⁸⁾。

重要なのは「フィン人は、イングランド人、オランダ人、スウェード人と並び」という比肩表現の使い方であるが、これはサリ独自の修辞ではない。ニューヨーク州デラウェア河流域三百周年記念委員長であり、チェスター市式典の執行委員長でもあったエーロ・K・イェルフもマサチューセッツ州のフィン系新聞『開拓者』¹⁹⁾への寄稿にあたり、ほぼ同様の表現を用いてい

る。

米植民時代の初期の開拓者たちのなかに、フィン人がいた事実を具体的に示すことは、すべての米国人にとって歴史的に重要なことです。フィン系アメリカ人とフィンランドの同胞すべてにとっては、それは歴史的に重要であるばかりか、啓発的な側面をもっています。われわれすべての者は、イングランドからのビルグリム、オランダ人、スウェード人と肩を並べ、フィン人が米初期の植民活動に貢献していたという誇りを持つことができます¹⁹⁾。

しかしエルフの文章が興味深いのは、情緒的なサーリと違って「フィン人がいた事実を具体的に示すこと」が「啓発的」で「イングランド人、オランダ人、スウェード人と肩を並べる」ことに繋がると断定している点である。すなわち、これまで取り上げてきた農民の姿とは、「フィン人がいた事実を具体的に示すこと」に他ならず、その姿こそが「啓発的」で、「イングランド人、オランダ人、スウェード人と肩を並べる」ような、国民的な誇らしさを得る源であると理解できるのだ。だが、この論理にはまだまだ資料的な補足が必要であろう。

米国社会史に視点を移したとき、二〇世紀初頭のフィン系ア

メリカ人が直面せざるをえなかった、もっとも大きな社会的障壁とは、「人種」をめぐるステレオタイプの差別であった。フィン人が「非印欧語族である」という比較言語学から導き出された（非白人種のレッテル）が、米国において劣等な「二流市民」という社会・文化的な差別へと転化するのにそう多くの時間を必要としなかったのである²⁰。たとえば合衆国大統領の名により選出された合衆国デラウェア流域三百周年記念委員会の議長で、ペンシルヴェニア大学教授の肩書きを持っていたスウェード系アメリカ人のクリストファー・L・ウォードが、『デラウェア河のオランダ人とスウェード人』(1880)、そして一九三八年の祝祭記念出版『デラウェア河のニュースウェードン』のなかで、あからさまな悪意をもって描写された以下のようなフィン人像は、この時代のフィン人に関する人種言説の核心部分を展開している。

一二世紀以降フィンランドはスウェーデン王国の一部であり、スウェーデンの文明、宗教、そして非常に大きな範囲でスウェード語がフィンランド的な要素を放逐したが、ふたつの国民は人種的起源と気質において大いに異なっている。
〔……〕フィン人はフィン＝ウゴル語族の支族で、〔……〕本来的にはノマド民族であるが、平原よりも森林に居住してい

た。〔……〕フィンランドのフィン人はこのような祖先の特性を今も引き継いでいる。

個々の身体特徴について、かれらは背丈が低く、身体的には、彼らは背丈が低く、体軀は屈強で、目尻がつり上がった灰色の瞳をもっていた。かれらは道徳的に公正で、忠実で、従順ではあるが、無気力で怠惰であり、そのくせ個々の独立についてひどく敏感である。つまるところ、モンゴル人種に非常に近い特性ありと見なさざるを得ないので。

フィン人は卓越した魔術使いとひろく評されていた。かれらにとって異教呪術はごく自然な所為であり、超常の能力は生まれついでる性であり、魔術は天分であった。〔……〕デラウェアに到着したフィン人にも黒魔術使いが複数おり、「フィン人ラッセ」は総督プリンツに魔術使用の罪で投獄され、「フィン人女カリン」も同様の咎で幽閉された。〔……〕ご覧の通り、フィン人たちはデラウェアの初期居住者のうちで実に興味深い分子だったわけである。

ノマド民族的な性行によって、数多くのフィン人たちがスウェーデン王国内に流れ込んだ。かれらは森林を開墾して農作物を育てたのだが、その森林を焼き払うというふしだらで放蕩じみた開墾方法は、王国政府に禁止されることになった。フィン人は狩猟にも非常に熱心だが、かれらの猟もまた不必

要に浪費的で、莫大な数のエルクをただ毛皮が欲しいためだけに殺し続けていた。その破滅的な行動資質に嚙ませる意図で布かれた法令も、フィン人からは平然と無視されてしまえばかりか、かれらがスウェーデンの未開地域に棲んで定住住居を有しないために、その咎を責めて捕縛するのに困難を窮めてしまおうのであった。

新開拓の植民地に輸出する資材として、かれらスウェーデン在住のフィン人たちは格好の対象に映ったことだろう。たしかに、かれら自身も無限に生息する野生動物たちに囲まれ、狩猟規制法もなく、焼き払う森林に事欠かない新天地に非常な魅力を感じていたはずだ。このように言葉巧みに並べ立て、移民への誘惑を吹聴したうえで、それでも自分から行くことと承しないときには、「森林破壊者のフィン人たちを捕縛」して、船に乗せて西の彼方へ送り出したのである²¹⁾。

「フィン人はモンゴロイドである」という言説は、二〇世紀初頭のフィン系アメリカ人にとって、合衆国内の黄禍論の隆盛とアジア系移民の排斥運動の高まりとともに、文字通りの「ヘタタール人の軌」として多重決定的な問題をもたらししていた。系統的言語学と形質人類学の混同による「人種分類法」は、二〇世紀初頭のこの時期に欧州でも北米大陸でも揺るぎない真理性を

有する科学的成果とみなされ、学問枠を越えて共有されるべき〈知識〉の総体の核を担う面をもっていたのである²²⁾。人種区分という学問手法は、学問の枠を越えて社会に浸透したとき、多彩な科学的分析の一選択肢ではなく、普遍的な価値を計測する黄金尺に変容し、社会は人種という〈知識〉で再構成されることになった。さらにその科学としての〈知識〉そのもののみならず、その周辺に付随する様々な下位知識、俗流物語、はたまた迷信・流言までもが不可分に社会の言説として流通するがゆえに、人種の物語はこの時代の抜きがたい棘として、特定の人びとを深く傷つけ続けた。教養としての人種観は、社会の知的上層へ登るほど根深く浸透していった。すなわち人種偏見の火種は多くの場合、小作農民や工場労働者どうしの喧嘩文句のなかにではなく、法律・教育機関での高尚な講義、箔付きの出版物のなかでくすぶっていたのである²³⁾。

ウォードの操るレトリックの誘導能力はじつに巧妙で、米社会に受け入れられやすい言説の〈素地〉をフィン人への中傷に転用していた。一九世紀初頭に北米大陸西部を横断探検しとめた『ピッツバーグからロッキー山脈までの旅行記』で名高い植物学者のエドウィン・ジェイムズ(1797-1861)の筆致は、この〈素地〉の解説に大いなる手がかりを与えてくれる。

狩猟者たち（ネイティブアメリカンのこと——引用者注）の支配する地域においては、森林の至るところで野営の火が焚かれており、かれらはしばしばアジアの平原に住むモンゴル人のように草原に火を放つ。すぐさま焼け跡地に柔らかく栄養ある草が生えることで草食動物が引き寄せられるわけだが、どうやらこの野焼きは毎年欠かさずに執り行われる行事らしい。

ジェイムズは他にも『旅行記』の数多くの箇所にて、スー族がオマハ族とクリー族との戦いで、当たり前のように森林地帯に火を放ち襲殺しようとする場面²⁶などを描写し、ネイティブアメリカンの行動の根底に「火を放つ」という属性を見いだそうと粘着質的な努力を続けている。このジェイムズの心理について、社会史家のステイヴン・パインは見事な分析を加える。

「アジアのモンゴル人のように——このフレイズは実に啓示的である。（……）ジェイムズが見取ったように、ノマディズムと火はいつでも密接に組み合わせられていたのだ」（傍点引用者）²⁷。

この一九世紀初頭の米国内における「ノマディズムと火」との言説的密着は、「人種主義と森林破壊行動」との言説的密着に表層を遷移させつつも、森林破壊が現実の社会問題として取

り上げられるようになる二〇世紀にまで生きながらえており、ネイティブアメリカンが行う森林放火の描写は、南部諸州の自然林焼滅の嘆きへ引き継がれていた。生態学への博識ぶりのみならず、米国の森林管理実務の規範を敷いた管理官として名高いインマン・エルドリッジは、一九一一年の米森林管理官協会の総会にて、フロリダをはじめとする南部諸州の文化習慣に起因する森林焼滅があまりに深刻な環境問題であると訴えている。

森林地帯に暮らす人びと、とくに南部のほとんどの地域で共通する生活感覚に、松林を毎年焼き払うことは無条件で好ましいとの思い込みがあります。農業入植者や牧畜業者は、厄介な下生えのブラックジャック・オークを繁茂させないようにし、家畜の放牧地域を増やすために森林に火を放ちます。テレベンチンの精製業者は、（……）所有する樹木園の下生えを育たせず蛇の生息を抑え、黒人労働者が松ヤニを簡単に安全に収集できるようにとの考えから、松林に火を放ちます。野営しながら狩猟を続ける一行は、秋から冬にかけて数多く森に分け入るのですが、かれらは數に火をつけて獲物を焙り出そうとします。これら数多くのさまざまなる人びとの集団が、長い期間にわたって、何のためらいもなく自由に森林を焼き払うのを習慣としてきました。かれらは法を破り、環境に大

きな被害をもたらすという知識も感覚も持ち合わせておりません。むしろ、長い目で見れば森林を焼き払うことは必要不可欠であり、森林にとって最良の結果をもたらすと能天気な信じ込んでいるのです²⁷⁾。

森林保護を訴えようとする裏面にて、南部人への蔑視を隠せないエルドリッジ演説の〈目録〉は、国立公園の徹底的な整備に北部各州や連邦政府の予算が割かれ、自然環境の保全（そして保全した自然へのレジャー）が関心の的になった時代に生きる北部人の凡庸なメンタリティを代弁している。

国立公園を主題にした記念切手発行の時代に、米南部では森林焼滅によって松の原生林が完全に姿を消した事実が新聞を賑わせていた事実は非常に興味深いだろう。「東海岸入植三百周年記念祭」が多くの人びとの心を引きつけていた一九三四年は同時に「ナショナル・パーク・イヤー」と定められ、グランドキャニオン、メサヴァード、ワイザードアイランドなど、雄大な自然を保護管理した国立公園の名勝十選が、次々に記念切手化された年であり、続く一九三五年も「ファーリーの大盤振る舞い」と評され、さらに一四種の国立公園の自然に取材する記念切手が発行されたのだ。

ゆえに、エルドリッジの口蓋から南部人を「見下すように」

発せられる嘆きは、ジェイムズの感じた「ノマディズムと火」という差別言説の系列性から一步も外に出ておらず、北部人の南部にたいする名状しがたい優越性を合理的に裏付けしてくれる実に心地よい嘆きであったのかもしれない。以上のような米社会の文化背景を踏まえれば、「ノマディズムと火」の系列性を巧みに操るウォードのレトリックが、ニューズウェーデン入植記念の祝祭を前にした（移民及び共和国本国の）フィン人たちに致命傷的な名譽の毀損をもたらしたのであることは想像に難くない。ウォードは前引用文の章に「森林破壊者のフィン人」(Forest-Destroying Finns)という題名を付した。その「森林破壊者」という用語は、エルドリッジ的な自然保護者の嘆息と、一七世紀スウェーデン王国の刑務記録とを二重に響かせるように仕組まれた政治的な言説と化している。絶妙な位置で「森林破壊者のフィン人たちを捕縛」(de skogsdånade finnarna gripas)²⁸⁾という言葉に思わせぶりの括弧が施されているのは、それがまぎれもない、ニューズウェーデン史の〈史料〉に登場する文句だからなのだ。

7 ウォリネン博士の蹟きの石

一九三八年一〇月一五日、米芬デラウェア河流域三百周年記

念委員会の最終会計報告書が、会計委員ジョン・サリーから発表された²⁰。全米三十余州から集められた資金の合計は、二万ドルをはるかに超える莫大な額であった。その支出の内訳には、前述のチェスター市に建設された記念碑に二七%、連邦政府公認の記念切手の発行に四%を使用し、その他として事務所の諸費用等が計上されている。しかし、これらの項目を合算しても上回るほど大きな支出項目が存していた。それは彼らが三百年祭最大の事業として遂行した、コロンビア大学準教授ジョン・H・ウォリネンによる『デラウェア河畔のフィン人』²¹の出版と販売に要した支出である。この「書籍出版とコロンビア大学出版局への経費支払い」の総額は実に全体の支出の三三%をも占めた。委員会は、費やせる限りの経済的・人的資源をフィン系アメリカ人待望の歴史書の出版にそそぎ込んだのである。フィン人たちのデラウェア三百周年記念祭は、ある意味で、ウォリネン博士に歴史書を執筆させることが目的であったとして過言ではない。

なぜならば、これまでニュースウェーデン入植史に関わる学術的な出版物のほとんど全てが、スウェーデン系アメリカ人の手による——もっと厳密にいうならば、アマンダス・ジョンソンという唯一の地域歴史家が執筆した——研究を底本にしてきたからである²²。ジョンソンの歴史記述は小植民地の驚くほ

ど微細な出来事までを網羅し、気の遠くなるような量の史料を駆使して綴られており、ゆえに祖先の系譜を一七世紀の北米植民地まで遡らせようとするフィン系アメリカ人の試みのすべてが、ジョンソンによる各歴史書に依拠していたのである。しかしながら、ニュースウェーデン史にフィン人を発見し、その存在を米国の前史に謳う喜びは、痛みと背中合わせだった。たとえば「いくつかの北方地域の総督と中央諸邦は、みずからの管轄下に住み、森林を破壊し鉱山周辺の森に被害を及ぼす元凶として知られたフィン人たちを捕縛するように（王国政府に）要請した」²³と記されるように、ジョンソンの語る歴史世界のなかで、フィン人たちはスウェーデン王国の法令を破り、秩序を乱す異分子として捕縛され、投獄されるときにしか姿を現さなかったからである。フィン人たちは延々と罪状記録を読み、ニュースウェーデンに「放逐」されるフィン人の記録をたよりに、自分自身の〈国民史〉の一篇を再構築しようとする歴史記述を出版し続けた。ウォリネン博士も例外ではない。

だが当時（も）、合衆国でもっとも権威ある歴史学専門誌『アメリカン・ヒストリカル・レビュー』誌の常任執筆者として、フェンノリスカンディア地域およびバルト海環地域の歴史研究書の評定を一手に引き受けていた博士は、これまでの誰よりも権威的な立場をものにしてきたと断言できる。ウォードの

悪意に満ちた著作についても、「史実誤認にあふれた駄本」³³と学術的に切り捨てた権力が博士の手には確かにあったのだ。

「いままさに三百周年の祝祭をあげようとしている（……）フィン人がニューズウェーデン特許会社の植民事業で果たした役割についての完全な物語を知ろうとしたとき（……）これまでわれわれにとって知りたい事実がすべて詰まっている信頼ある歴史書はただの一冊もなかった。しかし、コロンビア大学からウォリネン教授の著作が出版されることで、ついにこの欲求は満たされよう」³⁴とフィン系新聞の各紙で大々的に宣伝された『デラウェア河畔のフィン人』は、（すくなくともフィン人たちのあいだでは）大好評を博し、人びとに幸福感をプレゼントするはずだったが、鋭い批判は思わぬところから噴出した。ニュー・ハンブシャー州米芬デラウェア河流域三百年記念委員会委員長フランク・アールトネンは、『デラウェア河畔のフィン人』への不満と憤慨をタイプライターにぶつけ、友人のエミル・フルヤに送りつけている。

ウォリネン教授の著作のなかには正しくない主張が数多くあります。たとえば九八頁の「おそらく初期の入植者たちは、地面を掘り下げ芝土屋根で覆った粗末な住処に身を寄せなければならなかったか、ウイグワグ（ネイティブアメリカンの

用いる移動型住居——引用者補足）のような簡素な住居を利用せざるをえなかっただろう」という言及は、完全なまでに事実誤認で、フィン民族がノマド民であったとほざくスウェード人の虚偽中傷の片棒を担ぐ不幸な結果をうむことでしょ。〔……〕フィン民族はノマド民であったためしなど無く、どれほど簡素であろうとも、住居を森の木々から切り出してきた森林民族なのです³⁵。

フルヤへ届けられた手紙には、アールトネンがウォリネン博士に「直訴」した手紙のカーボンコピーが同封されていた。

〔……〕わたくしはハドソン湾から幾百哩も上流に分け入った米国北部諸州とカナダ双方のフィン人開拓者たちと生活を共にしてまいりました。そして若い時分にはフィンランドの森林地方までの旅路を踏破してまいりましたが、「地面を掘り下げ芝土を被せた屋根で覆った粗末な住処」で暮らしているフィン人とは一度たりとも出会ったことがありません。

〔……〕フィン人はいつの世でも斧を手に生きており、どんな未開の地のなかでも小屋も住居も丸太材を切り出してこしらえてきました。〔……〕わたくしが一六歳の頃より体験したウィルダネスでの生活では〔……〕人びとは一人の例外も

なく切り出し丸太でサウナ小屋を組み上げて、ウィルダネスで暮らすための最初の住処にしておりました。

〔……〕貴殿の「ウィグワグのような住居」に住んでいたという記述について、わたくしはそのような事態など木材が極端に不足している地域以外にはまったくありえないことだと言わざるを得ません。貴殿は疑いもなく、ラップランドのトナカイ飼いたちが居住に用いている「コタ」を想定しているのでしょうか、なかにはトナカイを追って順々に移動するためにこのタイプの住居を用いているフィン人もいることでしょう。しかし〔……〕好き勝手に想像の羽を広げて、有り余るほどの木材がどこからでも切り出せたデラウェア渓谷にそんな住居がフィン人によってもたらされたに違いないなどと書き記すことなど、許されていいはずがありません。

〔……〕フィン人の未開地での生活を記述するに貴殿が意図せずして記されたいくつかの叙述によって、フィン人がノマド民で、定住地を持たない流浪の民であるとのスウェード人たちの虚偽中傷が真実味が出てしまいかもしれませんから。フィン人にはこれまでもいままも、〔……〕ノマド民などでは決してないのです³⁶。

アールトネンの指摘は実的を射ていた。ウォリネン博士に突

きつけられた史実誤認の憤怒は、アールトネンが自分の体験を交えて詳細に教示しようとすればするほど諦念に変化していく。誰よりも「スウェード人による虚偽中傷」に敏感で、「フィン語とスカンディナヴィア諸語との出自に明確な相違が認められないのならば、当然のごとくフィン人は北ヨーロッパ人の範疇に含まれてしかるべきだろう」³⁷と明言し、誰よりも言語系統区分から派生した人種論を破棄しようとしていたウォリネン博士が、意外な地点から人種論の言説に足をすくわれてしまったのである。

8 〈白人〉への意志

その理由を考察しようとするならば、ニュースウェーデン史を記述するにあたって、スウェード人の披露する史料とそれに対してフィン人が反駁する史料の源泉が、ほぼ同じである点ばかりに拘泥できない。ウォリネン博士の熟練した審査の掌からこぼれ落ちて生き続け、なおもフィン人を貶めてしまう言説とは、実のところ、フィン人が飼いや慣らそうと熱心に望んでいる言説に他ならなかったからである。

デラウェア河流域の記念祭をはじめ、北米大陸東岸入植活動三百年記念が紹介されるとき、どこかの祝祭の場でも一字一句

違わず、しばしば定型句のように前置きされる言葉が存在していた。それは「初めての白人永住入植」(first permanent white settlement) という内実を欠いた、あいまいで、しかし魅力的な文言である。しかしウォリネンもウォードの著作を「駄本」と切り捨てる書評のなかで、「スウェード人とフィン人による初めての白人永住入植」²⁸ という表現を何のためらいもなく用いるのだ。

現実の北米植民は、欧州や大西洋上の島々のあらゆるエスニシティを複雑に巻き込んで実行された非国民粹的な活動だったのにもかかわらず（ニュースウェーデン入植の場合、植民指示者はスウェーデン、実際の運営拠点はネーデルラント、植民船の上級乗組員と随伴商人はドイツ諸邦の出身者、兵士や入植者はフィンランド、スカンディナヴィア、西部ロシア各地から集められたフィン系諸民族……）、そこに想定されている〈白人〉とは、「合衆国起源一三州の成立に貢献した国民」に代弁されるような社会序列の可視表現である。サリーやエルフが口を揃えて述べる願ひ、「イングリランドからのビルグリム、オランダ人、スウェード人と肩を並べ、フィン人が米大陸初期の植民活動に貢献していたという誇りを持つことができます」という「誇り」とは、二〇世紀前半の米国社会的な意味で〈白人〉であることの誇りと同義だった²⁹。

ここでわれわれが汲み取らなくてはならないのは、フィンランド共和国の記念切手発行が、密やかな〈白人たること〉への意志に繋がる仕組みである。「焼き畑での農作業風景を原画にしつつ、焼き畑での農作業の痕跡を消す」ことの政治性とは、焼き畑をする農民という〈歴史的存在〉を頭ごなしに否定しようとする足掻きではなく、二〇世紀初頭の言説編成体のなかでは絶対に触れられたくない焼き畑行為のネガティヴィティをあえて最低限度まで引き受ける行為である。それは〈歴史〉としての体裁を表面上保持しつつ、歴史事象の〈歴史性〉を都合よく切除するための綿密な施策なのだ。

その実行のために記念切手をはじめとした〈記念物〉はうつつけの特性を有する素材であり、入植活動三百周年記念は絶好の機会であった。米国の記念祭という枠組みのなかで発行される記念切手は、不可避に米社会のステレオタイプに曝され、フィン人たちの消し去りたいと願う差別言説ごとと漂白されていく。題材の焼き畑作業という特殊な開墾描写は通常の開墾作業として受け流され、安易に〈フロンティア西漸〉の系列に吸収され、極北の地からやってきた農民たちの生活は、ノスタルジックな漂うウィルダネスでの丸太小屋暮らしの原体験の系列のなかにイメージ処理される。フィン人というエスニシティのあらゆる固有性が除去されたあとに残るのは米国の前史にフィン人の

足跡が存在していたという内実なき文言であるのだが、まさにこの空虚こそ、一九三〇年代の世界情勢のなかで〈西洋〉の最東端の共和国を自認するフィンランドと、米社会のなかで

〈白人たること〉を自称するフィン系米国人たちが、心底希求していた結果であったのだ。

註

- (1) Benedict Anderson, "Replica, Aura and Late Nationalist Imagings," *Qui Parle*, vol. 7, no. 1 (1993): 1-21.
- (2) R. M. Spaulding, Jr., "A Political Analysis of United States Commemoratives," *Scott's Monthly Journal*, vol. 19, no. 7 (Sep. 1938): 255-257.
- (3) Robert Musil, *Frühe Prosa und aus dem Nachlaß zu Lebzeiten* (Reinbek bei Hamburg: Rowohlt, 1957), p. 324.
- (4) *Ibid.*, p. 325.
- (5) この政治運動のいづれの史的背景が、拙論「国民史」を適切に〈他者〉に登記するに「言語社会学」第三号、二〇〇九、二七九—三〇二頁を参照せよ。
- (6) "Letter of Emil Hurja to Eiel Saarinen, 27 Jan. 1938," Emil Hurja Papers (EHP), Box 138, Franklin Delano Roosevelt Library (FDR Lib.), Hyde Park, NY.
- (7) エミル・ヘンリッヒ・フルマ (1882-1953) は、ミシガン州タリスタルフォールの貧しいフィン系移民二世として生まれた。大学を卒業するとブラスカの金鉱採掘に従事し、のちに新聞記

- 者、ウォール街での金融ブナリストと特異な経歴を積んだ。一九三二年から民主党全国委員の専務理事に就任する。その後、選挙戦略に世論調査の統計処理技法を導入する。その効果は驚異的で、一九三二年の大統領選でフルマの示した全米各地の投票予想はじつに九七%の正答率を誇り、以降の選挙運営を完全に変化させることになった。
- (8) Melvin G. Hollis, *The Wizard of Washington: Emil Hurja, Franklin Roosevelt and the Birth of Public Opinion Polling* (New York: Palgrave, 2002), p. 93.
- (9) "Ray North's Memorandum and FDR's Response," FDR Lib., Official Files (OF) 2099.
- (10) Max Engman, "The Tug of War over 'Nya Sverige' 1938," *Swedish American Historical Quarterly*, vol. 45 (1994): 99. マスターン側からの批判に加え、政権内部にはブーサーの歴史画に描かれてくる「右手をまっすぐ上方に伸ばしたインディアナ部族長の挨拶が、ナチ式の敬礼を連想させる」との批判もあがっていた。 *Ibid.*: 112.

(11) Loc. cit.

- (12) もっと厳密に表現するならば、このような指摘は「抑圧されてしまっていた」のだ。まったく同じ誤りは、街並みが〈ログキャビン〉で埋め尽くされて復元されたウィリアムズバーグの植民都市復元事業にも指摘できる。一八四〇年の大統領選でウィリアム・ヘンリー・ハリソン陣営が掲げた「ログキャビンと林檎酒」という選挙宣伝のイメージ手法から、ジョン・タイラーの懐古趣味演説、人びとに広く流布したリンカンの立身出世物語、カーリー・アンド・アイヴズ工房が大量複製して販売したフロンティア風景のリトグラフに至るまで、〈ログキャビン〉というアイコンは米国民に神話的な情緒性を提供してきた。逆にニュースウェーデン入植の当事者とされ、〈ログキャビン〉を北米大陸に持ち込んだ国民と指摘されたスウェーデンやフィンランドからの移民たちは、米社会におけるエスニシティの地位を向上するため、〈ログキャビン〉の神話を、むしろ強めようとし、さらに〈ログキャビン〉の起源を完全に占有しようとして、罫迫り合いを展開したのである。〈ログキャビン〉の起源を問いただす当時の研究としては、以下を参照せよ。Fiske Kimball, *Domestic Architecture of the American Colonies and of the Early Republic* (New York: Charles Scribner and Sons, 1922); Henry C. Mercer, *The Origin of Log Houses in the United States* (Doyles town, Pa.: The Bucks County Historical Society, 1924); Harold R. Shurtleff, *The Log Cabin Myth: A Study of the Early Dwellings of the English Colonists in North America* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1939).
- (13) Geddes Smith, "If the Swedes and the Finns,..." *Scott's Monthly Journal*, vol. 19, no. 7 (Sep. 1838): 261. スウェーデンとフィンランド

イン史的視点から眺めるとき、もっとも評価されるべきは、まぎれもなくフィンランド発行の切手であろう。

- (14) Oavi Koivukangas, *Delaware 350: Amerikansittolaisuuden Alku. Nykytyökans* (Turku: Sittolaisusinstituutti, 1988), p. 40.

- (15) しかし、アールノ・カリモの描く焼き畑耕作の原画も、多分に〈新大陸〉にたいする叙事詩的な効果が全面にだされておられ、実際の焼き畑耕作とはかけ離れた神秘的な印象を与えられるように構成されている。身も蓋もない言い方をすれば、主題自体が読み取り手の感情に配慮してはじめから「美化」されているのだ。現在はヘルシンキのアテネウム美術館に所蔵されているエーロ・イェルネフェルトの『焼き畑作業』(Svedjeböning, 1893)に描かれた農民と比較すると、この美化の「イデオロギー性」がありありと浮かび上がるだろう。老ネイティヴアメリカンたちが見守る丸太小屋を背景に、若者は開墾に精を出し、女性は子育てに専念するという構図も、欧州人の暴力的な入植を北米大陸占有者の歴史哲学的な交代劇として正当化しようとする「北部アメリカ人の嗜好」に緻密に沿ったものであり、カリモ自身も記念切手用の原画を引き受けたとき、一九三八年の米国においてフィンランド共和国とフィン人がどのようにイメージされるべきなのかを正確に見据えていたことが解る。だからこそ、焼き畑の痕跡を消そうとしたフィンランド政府の意図は、綿密に歴史化されるべきであろう。
- (16) メールのモチーフを見るにあたっては、以下の資料に掲載されている写真とキャプションを参考とした。American Finnish Centenary Committee (ed.), *Official Booklet, First Finnish Settlement in America 1638: 300th Anniversary Celebration*,

- Chester, Pennsylvania, June 29, 1938*, stored at Siirtolaistus-instituutti, Turku, Finland.
- (17) *Ibid.* なぜ農民の一家は涙を流しているのか? それはスウェーデン史では、数多くのフィン人が森林法を破った罪で農民同然に〈新大陸〉に送られたものの、かれら「流浪のフィン人」(drift-finns)は故郷に未練がなげ様子だったと信じ込まれていたからである。マールトネンの表現した農民像は「人間の感情」をフィン人に認めようとしなかったスウェーデン王国史へのトーンチャーヤである。
- (18) John Saari, *The Meaning of the Delaware Tercentenary Celebration to Finnish Americans* (n. p. 1938).
- (19) Eero K. Djert, "Finn's Early Pioneers" in *Raitavaia*, June 10, 1938.
- (20) 米国史のなかで〈モンゴロイド〉(帰化)不能人種〉と差別的に類型されたフィン系移民たちの苦難については、拙論「歴史書を埋める国民のメンタリティー」(『言語社会』第二号、二〇〇八、二二〇—二四〇頁)を参照のこと。フィン人が〈西洋〉とちがう度によって身体計測されたときに直面した人種論説については、以下の研究を参照せよ。Aira Kemlinnen, *Mongoleja vai Germaaneja? Rotutoritoiden Suomalaiset* (Helsinki: Suomen Historiallinen Seura [SHS], 1985); *Finn's in the Shadow of the "Aryans": Race Theories and Racism* (Helsinki: SHS, 1998).
- (21) Christopher L. Ward, *The Dutch and Swedes on the Delaware, 1609-64* (Humphrey Milford: Oxford University Press, 1930), pp. 102-103; *New Sweden on the Delaware* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1938), pp. 43-44.
- (22) この大いなる混同を生真面目につきつめ、果ては西洋文明ヘンシズムに陥ってしまったイデオログといえ、ヒューヨーント動物学協会会長・アメリカ自然史博物館およびアメリカ地理学協会参事を務めていたマディソン・グラントだろう。その主著『偉大なる人種の衰退』は、学術研究書の形態をとると共に、ヨーロッパ文明の斜陽とアメリカ市民の義務を宣言する北米型アンソロサクソニズムの最後期変種として興味深い。ちなみに同書ではフィン人は〈白人扱い〉を受けている。Madison Grant, *The Passing of The Great Race: or The Racial Basis of European History* (New York: Charles Scribner and Sons, 1916).
- (23) 拙論「歴史書を埋める国民のメンタリティー」二二八—二三〇頁。
- (24) Edwin James, *Account of an Expedition from Pittsburgh to the Rocky Mountains, Performed in the Years 1819-1820* (London: Printed for Longman, Hurst, Rees, Orme, and Brown, 1823), p. 405.
- (25) *Ibid.*, pp. 254-255.
- (26) Stephen J. Pyne, *Fire in America: A Cultural History of Wildland and Rural Fire* (New Jersey: Princeton University Press, 1982), p. 76.
- (27) Inman F. Eldredge, "Fire Problems on the Florida National Forest." *The Society of American Foresters Proceedings*, vol. 6 (1911): 166-168.
- (28) Christopher L. Ward, *Svenskarna vid Delaware* (Stockholm: Norstedts, 1938), p. 84.
- (29) John Saari, "American Finnish Delaware Tercentenary Com-

- mittee Financial Statement, New York, N. Y., October 15, 1938." EHP, Box 136, FDR Lib.
- (30) John Henry Wuorinen, *The Firms on the Delaware, 1638-1655: An Essay in American History* (New York, Columbia University Press, 1938).
- (31) 下記のシモンソンの著は連邦議会の議決資料として、第七四期米連邦議会において公決議第一〇二号「アメリカ合衆国政府と合衆国民のミッソウエバ河流域における最初の永住入植三百周年記念式典その他」、スウェーデン政府及びその賓客の参加を招待する決議案」(下院合同決議第四九九号)に付帯されたヒュームスウェーデン史の「米国公式歴史書」の位置を占めてゐる。Amundus Johnson, *The Swedish Settlements on the Delaware: Their History and Relation to the Indians, Dutch and English, 1638-1664, with an Account of the South, the New Sweden, and the American Companies, and the Efforts of Sweden to Regain the Colony* (New York: A. Appleton and Co., 1911).
- (32) Amundus Johnson, *The Swedes on the Delaware, 1638-1664* (Philadelphia: International Printing Company, 1927), p. 144.
- (33) "Reviews of Books by John H. Wuorinen," *The American Historical Review*, vol. 44 no. 3 (1939): 647-649.
- (34) "The Firms on the Delaware" in *Razavata*, June 17, 1938.
- (35) "Letter of Frank Aaltonen to Emil Hurja, July 16, 1938." EHP Box 138, FDR Lib.
- (36) "Letter of Frank Aaltonen to John H. Wuorinen, June 21, 1938." EHP Box 138, FDR Lib. ちなみにアールトネンは「ウォー」に対して手紙を送りつけてゐる。五枚の便箋に刻み込まれ

た異議申し立ては、ウォード本人とどまらず、ニューヨークランド地方の新聞各社に送付され、さらには大統領秘書ジェームズ・ローズヴェルト御指名の直訴状としてホワイトハウスにまで郵送された。"Letter of Frank Aaltonen to James Roosevelt, June 13, 1938." FDR Lib. OF 2242.

- (37) John H. Wuorinen, *Finland: An Historical Survey* (Helsinki: Valtioneuvoston Kirjapaino, 1938), pp. 3-4.

- (38) "Reviews of Books by John H. Wuorinen," 649.

(39) しかしこの矮小な「白人」への意志の言説が、大戦戦間期の米社会という局地的な場のみで働いていた特殊歴史的なものという結論は出せない。フィンランド共和国がテラウエバ河流域の記念祭参加を虎視眈々と狙い、フルヤやウォリネンに密接な連絡をとっていた一九三〇年代、フィンランド共和国の東部国境には、ロシア帝国時代から引き続いてソヴェエト連邦の一部となつてゐる東カレリアを将来的にフィンランドに併合しようとする数多くの学生が集まり、しばしば国境を越えていったのである。かれらが投げかける東カレリアへの視線は、フィンランド共和国の西方でフィン系アメリカ人が投げかける歴史の視線と双子の関係にあつた。

「カレリア人たちが今日の東カレリア地方にやってきました。この地域には少数のノマド民であるラップ人しか居住していません。カレリア人たちはみずからの力で堅固な住居を建築して、この地域の最初の永住入植者となった。はるかに後になって、ロシア人たちが東カレリアに侵攻し、征服者としてカレリア人たちを根絶しようとしたのである。カレリア人たちの生と自由のための抗争は、今日に至るまでかれらの驚くべき屈強さに支えられてきたが、この抗争の最新の動向は、ひょっとしたら歴

史上も、とも運命的で過酷な様相を呈しているのかもしれない。⁵⁰」[Akateeminen Karjala-seura (ed.), *East Karelia: A Survey of the Country and its Population, and a Review of the Carelian Question* (Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seuran Kirjapainon Oy, 1934), p. 35]

先住者を土地に定着しない者と蔑視的に括り、文明の段階を住居の堅固さで評価し（それはドメステイック・イデオロギーの政治変種と指摘できよう）、自国民とその近縁者に進歩的な気

質を付与して異郷への入植の体験を正当化しようとする語りと論理の形式は、フィンランド共和国とフィン系アメリカ人たちがニューズウェーデン祝祭に臨んで「記念碑・記念メダル・記念切手」を駆使し、〈新大陸〉に生きるフィン人の祖先に農民として「耕し」、堅固な住宅に「定住する」入植者像を米国民に何度も提示することで、駆逐しようとする苦心した言説群、すなわちウォードやジョンソンがフィン人に投げつけた人種論と差別の言説群に絶望的なまでに近いのである。

(すずき としひろ／修了生)